

一部・二部の区別なしに一体で活動していました。安井利男主将（S 38卒）の時に、学院のグラウンドが綱島へ移転してから時間の都合等で一緒に出来なくなり、二部だけ自治会馬術部として単独で活動するようになりました。一年間の活動内容としては、新入生歓迎の意味を込めた御殿場での遠乗り、関西遠征、名古屋の森林公園での合宿等々、全く体育会馬術部と同様でした。それらが、野沢利夫主将（S 39卒）、水島正彦主将（S 40卒）、金山屯主将（S 41卒）、そして私へと引き継がれ、念願の自馬を持ち、更には奈良義弥（S 43卒）、栗田正幸（S 44卒）大木敏盟（S 45卒）、原文雄（S 46卒）、へと続き小川藤夫主将（S 47卒）の時に諸般の事情により従来の姿に合併するに至りました。

当然、OB会も緑蹄会という組織が出来て独自に活動していましたが、現在、本来の姿に戻ったことにより、緑蹄会も発展的解散となって、緑蹄会会員全員が緑鞍会に自動的に組み込まれたわけです。今回新たに名簿を作成されるについて、旧緑蹄会会員が分かるように配慮して下さいました事に感謝いたします。



青湧号で好成績を収めた角南良彦氏(S45卒)



初めての自馬 青湧号で、青学のマークの入ったゼッケンを付け、試合に出場した神谷亮司氏

昭和32年頃、青波号で障害を飛越する内藤喜嗣氏。馬場が校庭にあった時代で後ろの建物は2号館



昭和16年頃、乗馬クラブにて障害の練習をする阿部雄三氏(S18年卒)。当時の乗馬クラブでは、高い障害は飛ばしてもらえなかった。障害を高くすると、直ぐクラブの雑音さんが飛んで来て低くしたそうです。

白金一丁目に超高層マンション分譲

「白金高輪駅」に隣接した港区白金1丁目に大型複合再開発事業が進行しています。その中にある超高層マンションは2003年秋に分譲開始の予定です。本地区は交通の利便性が飛躍的に向上したことでこれからの発展が大いに期待されます。事業の完成は2005年を予定しています。



白金一丁目東地区市街地再開発組合

有限会社 三洋製作所

理事長 間明田 勝彦

代表取締役 間明田 勝彦

〒108-0072 東京都港区白金1丁目12-3
TEL 03-3473-7865 FAX 03-3473-7875
E-mail : shirokane@mx1.ttcn.ne

本 社 東京都港区白金三丁目11-12
〒108-0072 電話 03(3441) 3042番
F A X 03(3446) 1451版

 *Marui*

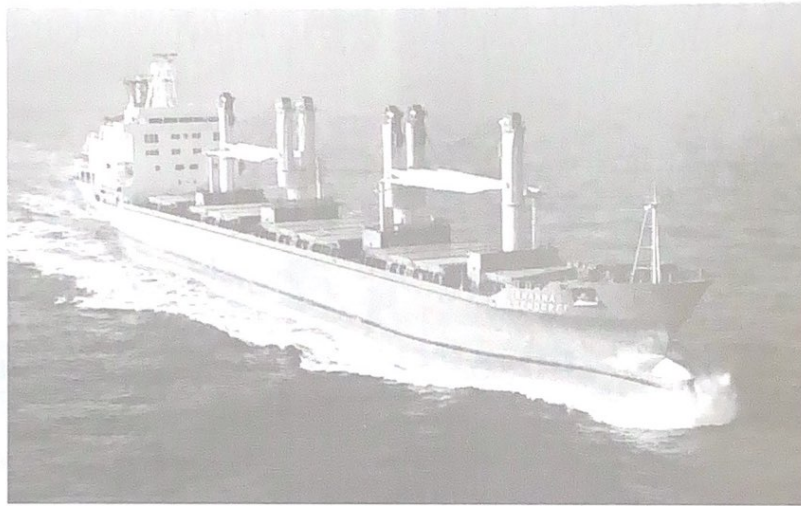
MARUI CO.LTD.,
MODE HONTEN/2-12-1 HOKAN CHO OKAYAMA CITY TEL.086-252-3401
BOUTIQUE-LIVE/21-21-187 MONDEN SOJA CITY TEL.0866-80-8111
R Ito Yokado 2F 2-10-102 SIMOISHII OKAYAMA CITY TEL.086-235-2700
URL・http://www.urban.ne.jp/home/marui/

F-WAVE CO.LTD.,
Okayama-Syokoukaigyo 7F
3-1-15 KOUSEI CHO OKAYAMA CITY TEL.086-214-23
URL・http://www.f-wave.co.jp



SEA TRADE & Agency Inc.

SHIP AGENCY SERVICE IN JAPAN
FOR
WORLDWIDE SHIP OWNERS AND MARINE INDUSTRIES



Majour Customers

- Odfjell Seachem AS,
Bergen, Norway
- as No.1 chemical tanker operator in the world -
- Oldendorff Carriers GmbH & Co. KG,
Luebecj, Germany
- as No.1 dry bulker Owners/Operators in the world -
- Perobras Transporte SA Tranpetro-Fronape,
Rio de Janeiro, Brazil
- Brazillian National Oil Company -
- Stena Bulk AB,
Gothenburg, Sweden
- Biggest marine industries in Sweden -
- Sten-Tex LLC,
Houston, USA
- Joint venture between Stena and Chevron-Texaco -
- Transocean Sedco-Forex,
College Stations, Texas, USA
- Deep sea drilling vesel owners and operator
- And over 100 other companies-

Suite 1003 - Daiwa Jisho Building, 74-1 Yamashita-cho,
Naka-ku, Yokohama 231-0023 Japan

Tel: 045-640-6211 FAX: 045-640-6211 E-mail: agency@seatrade.co.jp

青山の格調高いキリスト教式結婚式場

青山学院関係の皆様にはサービスの特典がございますので、
お食事・クラス会・パーティー等にもぜひご利用ください。



GLORY CHAPEL 国内屈指の規模のグローリーチャペル



クラシカルで重厚なムードのホーリーチャペル HOLY CHAPEL

アイビーホール 青学会館

お問い合わせ **03-3409-8181** 〒150-0002 東京都渋谷区渋谷4-4-25 (青山学院記念館隣)
ホームページ <http://www.aogaku-kaikan.co.jp>

祝 青山学院大学馬術部 80周年

牧野ライディングソサエティ

〒930-0275 富山県中新川郡立山町利田 868-2

TEL : 076 (463) 0814

代表 牧野 孝喜

会員 矢作 直也・祥子(昭和56年卒)、澤田 麻衣子(現役 3年)

遠野の思い出

東野合宿記

昭和52年、青木真次総監督、福原先輩、張間先輩を中心とした監督団のご尽力により当時の学生達は夏休みを中心に7月、8月の2ヶ月間を馬匹の避暑と合宿による騎乗技術の強化のために岩手県遠野市において遠征合宿を実施させていただくことができました。

故青木真次総監督が青山学院の馬術部のために、私財を投下して昭和56年までの5年間、人馬ともに事故もなく、毎年実施させていたのです。

合宿所は南部の曲がり屋、厩舎と馬場は遠野乗用馬育成センターをお借りして馬とともに思い出に残る学生生活を過ごさせて頂きました。

昭和52年の初年度には、市内をパレードし市民の方々と懇親を深め、サッカーや野球などの対抗戦も実施しました。

また、市民の方々もご招待し馬場においてエキシビジョンマッチとして、障碍飛越競技とカドリールを披露いたしました。これらも全て乗用馬の産地として羽ばたこうとしていた当時の遠野市の方々と青木総監督の人望で実現できたのです。

合宿での生活は、いななき荘（曲がり屋）から育成センターの馬場までの山道の切り開きから始まりました。当時一年生であった我々は、女子先輩たちが作ってくださる食事が一番の楽しみだったように記憶しています。（特に井上（旧姓池田）さんのピーマン肉詰め）また、昼も夜も矢沢永吉や荒井由美の歌を大声で歌ったことも思い出です。

53年以降、青木総監督は馬のふるさと遠野を広く知ってもらうことと、日本の乗用馬による馬術の普及のため、この遠野を舞台に『馬のふるさと』と言う映画を作ることを始めました。



故青木総監督を囲んで

当時、大学二年生、三年、四年と三年間、青木総監督の映画撮影のほんの一部をお手伝いすることになりました。

映画製作のプロの方々、このシーンでは馬が走ってもらわなければ困る、との事でジープを使い、馬を追ったときに我々若き学生は、恩知らずもはばかり青木総監督に逆らいました。そのときに総監督は「僕には時間がないんだ!!」と強い口調で、また少し悲しそうなお顔で言われました。

後日、体を蝕んでいる病があるということをご自身が知っていたことを知り、この言葉の意味を知りました。

卒業直後の昭和56年に現役をたずね、遠野に行きました。この年を最後に遠野合宿が終了したのですが、遠野の乗用馬生産は軌道に乗り始めていました。青山学院においても遠野産のサラブレッドの青遠（カネニシキ）号が活躍していたころです。

故青木総監督の馬に賭けた情熱と遠野への思いが青山学院馬術部の歴史の一頁に永久に残ることを願って、僭越ではありますが、追加の寄稿を致しました。

（矢作 直也記）

先頭が青駒号、池田（現・井上夫人）
後ろが青雅号、登内（現・尾平）



青 駿

島崎 紀子

(昭和五十年卒)

ここ数年、私が住んでいる日本橋も大きく変わろうとしています。屋上に出てまわりをグルリと見渡すと、ビル建築のクレーンがあたりこちらで動きまわっています。品川が変わり、六本木が変わり、汐留がと東京いえきつと、日本中が変わり始めているのかもしれない。

数年前、網島お別れ会の為にこれこそ卒業以来(ちなみに卒業は昭和五十年ですが)初めて網島に足を向けました。中原街道はそれでも何度か走ってはいます。網島の町は、四半世紀以上の御無沙汰という状態でした。無事に到着できるかしらと、心配しながら車を走らせました。見た事のあるような、又全然知らない町にいるような、そんな不思議な気持ちを感じながら町中を走って、グラウンドに到着しました。合宿所の方から車を入れて馬場に到着、時代が何十年も前に一気に戻ったように、色々な光景が一度にフラッシュバックしてきたものでした。なつかしい顔となつかしい風景、さすがになつかしい馬達はいませんでしたけれどね。この度、青駿号の思い出をという事でしたが、青駿号といって一番先に思い出すことは、新入生の頃一番乗りたいた馬だったということ



昔から愛されていた晩年の青駿号



昭和39年、新場で入賞した頃の青駿号、元気一杯でした。

す。おとなしくて、反動は低く、おまけに号令を聞いて自分で動いてくれる。何もできなくても何の心配もありませんでした。どうしてオイモって呼ばれていたんでしょうネー。ただ駄足がどうも、心地よくなかったですね。青駒、青冠、青貴、青虎、etc、名だたるくせのある馬達の中で、本当に静かな馬でした。高等部の頃から七年間、本当にお世話になりました。今、遅ればせながら、「ありがとう」と、言わせてもらいます。

最後になりましたが、馬術部創部八十周年おめでとございます。いつまでも、馬術部が隆盛であることを、心より願っております。

青蓮号のこと

宮川 容子

(昭和五二年卒)

一九七二年(昭和四七年)春。網島の土手にたんぼの咲くころ、明け四歳の彼は鉄も履かずに飄然と馬場にやってきました。

聞くところによると、買付けに行った某先輩が夕方の薄暗がりで見れば即決、明るいとこで見直して「しまった」と思った時はもう遅かったそう。アラ系、牡、鹿毛、父親不詳、登録名「No.1の5」。この整理番号みたいな名前が誕生の時から彼が如何に期待されなかったかを物語っている。胴長のうね腰付きが変でまっすぐ立てない。間のびした顔にベロ出しっぱなし。なぜか水が鬼門で、水たまりも水道ホースもブリキのパケツも全部ダメ。とは言え数々の欠点のお蔭で彼はこの年まで遊んでいられた訳で、世の中何が幸いになるかわからない。

入厩即練習馬確定、鼻面を天井に向けペロをなびかせて馬場をのそのそ回っていた彼の秘めた才能を見破ったのは、かの阿部先生だった。そして特訓の後、彼は青学馬術部の誇る馬場の切り札、青蓮号に变身する。生まれ変わった彼は、当時B馬場と呼ばれたクラスでは向かうところ敵なし。審査員は彼の顔を見て点をくれるんだ、と噂され、鞍に乗っかっているだけで入賞は堅いと言われ

た。経路の順番はもとより、どこが見せ場かまで心得ていて自ら完璧に演技するので経路違反さえしようがない。かくいう私も彼の恩恵でかわいい銀のカップを一つ頂戴している。

華々しい戦績の一方で、彼は何考えてるのかわからない奴と言われていた。馬房の扉を開け放しておいても出て来もせずそのままぼーっと日向ぼっこしている。反抗もしないがなつきもしない。しかし、同じ年に綱島に入室し、奇しくも同じ乗馬クラブに引退し、21歳で病没するまでの長年を付き合ってみて、彼は馬鹿でも鈍でもなくむしろ鋭敏で頭も並以上に切れると思うようになった。人間で言う自閉症に近かったのかもしれない。

仙葉会長のご好意で彼は晩年をのんびり過ごし、今は埼玉馬事会の馬場の隅、彼が好きだった木陰に眠っている。

おまけ

ナンバーワンの話には(個人的に)後日談がある。彼が亡くなってすぐのこと、故阿部先生の墓前に報告に行き、つつじが丘の駅前で巣から落ちた雀の雛を拾った。彼によく似た鹿毛色の雄雀は「ナンバーチユン」と名付けられ、彼の生まれ変わりとして可愛がられ、ギネスに挑戦できそうなほど長生きして三年前に亡くなった。実はちょっと期待していたのだが、今度は戻ってきてくれなかった。どうも里子に出したのがまずかったらしい。



青蓮号(ナンバーワン)に騎乗して、全日本学生馬場に出場した矢作直也氏

青蓮号

矢作 直也

(昭和五六年卒)

彼の名はナンバーワン、しかし燦然と輝く青山学院馬術部の名馬の中でもひとときを輝く名馬であったと語るOBの方は少なくないはずである。なぜならば、絶対といってよいほど人を襲ったり、暴れたり跳ねたりしない、そしてどんな初心者も騎乗しても安心してみることができる。そんなナンバーワンもひとたび馬事公苑の馬場坪の中に入

っただけで、騎手に賞状やトロフィーをプレゼントしてくれる、そんな馬がナンバーワンその名のとおりナンバーワンなのであります。

昭和四二年四月二八日(一九六七年)生まれ、アラブの鹿毛馬でとってもおとなしい牡馬でした。唯一彼の欠点は水が大嫌い。阿部先生の調教で、B馬場を完全に覚えていて誰が乗っても上位間違い無しなのですが、騎手が動かしているのではなく馬がやっってしまうのです。

高等部一年のとき初めて綱島に行った日に乗せてもらった馬が、ナンバーワン、とてもおとなしく馬術の門を開いてくれました。こんな彼に当時OBであった三谷先輩と踏歩変換を覚えさせ、関東学生の学生賞典に出場し、全日本に進めることができました。しかし上位種目では踏歩変換もビツクリ変換でB馬場のように必ず上位と言うわけには行きませんでした。

しかし彼は、ひと際大きく輝く青山学院馬術部の名馬です。多くの初心者から、多くの部員に賞状を届けてくれた馬は多分、青蓮がナンバーワンでしょう。



青隼号

(スズハヤブサ 昭和四二年六月二日生)

宮澤 真一

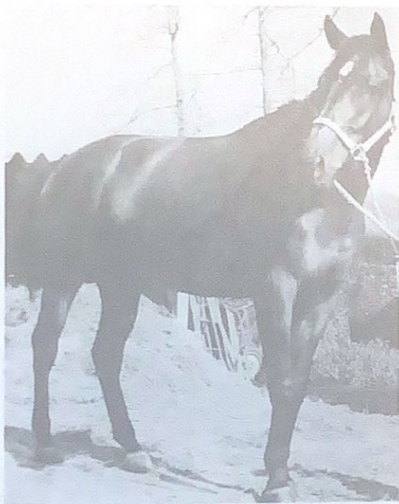
(昭和五三年度卒)

本年、馬術部創立八十周年にあたるこの事。私が、学院に入学し馬術部に所属した年は、確か、五十周年であったかと思えます。馬術部生活の貴重な経験を始めた当時から、はや三十年か……。おもわず、ため息がでそうである。振り返ると、楽しくて、楽しくて、辛くて、辛くての日々。先生、先輩、後輩そして他大学にいたる馬仲間たちの顔、愛馬とのふれあい、東都大学馬術競技会での初めての入賞、一年生の綱島合宿、作業光景、初めての遠野遠征合宿、又、学院での一年E組での授業、部室での光景といった、さまざまな出来事が、あたかも走馬灯をみるかのごとく現れてくる。

さて、私は、入部まもなく、スズハヤブサ、愛称、スズの虜になりました。馬屋では、いつも遊び心をもって部員になにかを話しかけているような、そんな感覚がどこかにあったかと思えます。私は、なによりもそれが気に入りました。私の、大切にしている想い出のアルバムの一ページ目は、スズの六ツ切り写真が貼られています。顔立ちは、凛々しい面長、そして、愛くるしい目、柔らかな

鼻づら、美しい鹿毛、額に小さな流星、体高一七〇cmを超える立派な馬体。尻尾がわずか短めでした。スズを想うと、つい親バカ文章になってしまいます。

スズハヤブサは、阿部先生と塚原先輩が手塩にかけて育てた馬で、競技会で活躍を期待されたが、それはかなわず、練習馬として、いまでいうリストラされるまで綱島で貢献しました。速歩で横揺れする反動、不用意な拍車があたると、後肢をおおきく蹴り上げる、騎乗姿勢がしっかりしていないと、ひっかける、部員を落馬させた回数には相当なものである。しかし、綱島馬場では、障害を上手にこなし私は、いろいろと学ばせてもらい向上できたのです。いま、あらためて、スズハヤ「ありがとう」と伝えたい。スズの首にぶらさがったあの温もりと感触、スズと一緒に障害飛越したあ



のときの感覚、私は、生涯忘れないことと思えます。最後に、頑張っている現役生にエールをおくります。

Believe that there is a chance
until the end!

青駿号

井上 和宣

(昭和五四年卒)

私が青学に在学し馬術部に在籍したのは、一九七五年から一九七九年です。競馬場下がりで「いちべい」が青学にきたのは一九七六年だと記憶しています。詳しい経緯は覚えていませんが、競馬では障害馬として重賞レースで入賞経験もあったと思います。六才鹿毛、首が異常に長く、細長い馬でした。

当時のチーフコーチ高津彦太郎さんは、「ひらめきたいな馬だな」と言われました。性格はとてもおっとりして、人なつっこい馬でした。

「青駿号」、命名は確か当時の担当コーチだった高橋正樹先輩だったと思います。コーチ高橋、馬匹井上で3年間つき合いました。いつも二人で担当していました。調教高橋、お世話井上コンビです。「いちよべい」と皆に呼ばれかわいがられ



1977年東都馬術大会にて、『いちよべい』こと青駿号に騎乗して見事新馬戦に優勝した井上和宜氏

ていました。

競馬障害馬上がりだったので、違和感なく馬術障害に取り組めたと思います。

確か一九七七年東都馬術大会、新馬戦。「いちよべい」と私は共に最初の試合でしたが減点0満点で優勝しました。練習でも、試合でも私が騎乗して障害を止まったことは一度もない。いや、止まったことを覚えていない。それほど「いちよべい」を信頼していました。少なくとも、彼と障害に向かって、止まるかも知れないと思ったことは一度もありません。

四年間、いろいろな馬に乗りましたが、唯一私と心が通った馬でした。彼の性格、気持、体調、気分、全て分かりました。彼のことは、今でもたまに思い出します。

卒業後、二年間大阪で勤務。その後今日まで岡山にいますので一九七六年以降の事は知りません。間違いない、『いちよべい』は、青春を共に過ごした、私の大切な友馬です。

青駿号のこと

多田羅（堀川）万由美
（昭和六十年卒）

青駿号、通称イチベエは本当に美しい馬だった、性格を除いての話であるが。私が初めて彼に会ったのは、高等部一年の春、馬術部に入部した頃の頃。今でも洗蹄所に繋がれ、毛艶の良い黒鹿毛のスリムなボディを日に輝かせながら、首を下げ前がきをしていた光景と音と辺りの匂いとが容易に思い出される。

性格を除いて、と書いた。とにかく嘔む、蹴る手入れ時に暴れる、馬房に入るとお尻を向けてくる、前を通ると耳を伏せ目をむく…枚挙に暇がない。見た目の格好良さとのギャップに惹かれたとしか考えられない。好きに理由なんか、ない。

大学に入り、一端の馬の世話がこなせるようになったとある日のこと。練習後の手入れのあと、馬房にちよつとゆるめに繋ぎブラシをかけ始めた。「ちよつとゆるめ」がいけなかった。その日

に限ってイチベエはおとなしかった。静かにブラシをかけさせてくれていた。彼のオナカをひとなでしたときに事件？は起こった！振り向きざまに私のオナカを噛んだのだ！そしてそのまま首を上げたので一瞬つまみあげられたかんじになり、着ていたボタンドアウンのシャツをびーっと破かれてしまった！あまりの痛さに無謀にも彼の足元にしばしうずくまったあと、一体私のオナカはどうなったかと思えば、おへその周りに菌型くつきり、一部血も。それより驚いたのが内出血。かなりの範囲が真っ青。こりやまずいと馬房から出ようにもシャツはびりびり。ちよつと前を通りかかった同級生に馬房の中から「トレーナー脱いで貸して」と頼み、晴れて脱出。そのことを武勇談のように語る私は皆から「普通、馬がくわえられるような肉は腹にはついていないもんだ」と大笑いされたのだった。

彼の被害にあった人は数知れない。けれどオナカをやられたのは当然私だけ。そう思うとやはり彼のことは、忘れられない。



もう！ お腹は咬ませないから！

シヨウグン号

青将号

高梨（清水）文子

（昭和五八年卒）

確か、競馬場からあがってきた時の名前
は、イナリシヨウグンだったと思います。

その後、調教を重ね、いよいよ公式の競技に出
場するという時に、「青将」という青山学院のオ
フィシャルネームを授けられたのです。馬体はそ
れほど大きくなく、たてがみの黒い鹿毛でした。
足元は、ソックスをはかせたようにくっきりと白
く、顔の星は鼻先にむかって少し流れていました
が、先のほうは桃色がかった肌色に縁取られてい
ました。そして、（たぶん？）右の鼻の穴の方へ、
わずかに曲がっていたので、いつも、ちよっぴり
首をかしげているように見えました。それが、愛
嬌のある性格と合わさって憎めないところであ
った。

その当時、私たち学生の練習をみてくださって
いた、獣医の水野先生に預けられて、乗り手とも
ども馬場馬術の調教を受けました。小柄だったせ
いもあり、女である私にもバランスよく乗ること
さえできれば、ハーフパスや踏歩変換もできまし
た。中でも、伸長歩はふわっと浮き上がるよう
に、乗り手を雲の上に乗せ馬場の斜線をまっすぐ
に進んでいきました。とても、気持ちがよくった

です。現役最後の競技では、学生賞典馬場に出場
し全日本出場の権利を獲得することができました
が、秋の全日本大会では、審査員席の後ろから、
後輩の演技をみて、「將軍の勇姿」をその時初め
て、目のあたりにしました。

卒業してからは、大学馬術部からも遠ざかりシ
ヨウグン号を見ることも無かったのですが、何年
か後に、相模乗馬研究所へ退屈したと聞き、訪ね
ていったことがあります。「イナリシヨウグン」
と書かれた馬房から、あいかわらずちよっつと小首
をかしげて顔を出し、元氣そうにしていました。



シヨウグンこと青将号と一緒に！！



青遠号

（カネニシキ）

矢作（大山）祥子

（昭和五六年卒）

「印南清先生と城戸俊三先生に、乗馬の産地遠
野で素晴らしい馬を選んで頂いて、瀬川君（牧野
孝喜氏）に調教してもらっているからね」と青木
真次監督（当時）が話してくださった日のワクワ
ク。初めて筑波ライディングパークへ乗りに行っ
た日のドキドキ。どんな姿の馬かと想像もつかず。
そして実物にあつたときのビックリ。とつても小
さな首の短い、でも愛嬌のあるかわいい女の子だ
ったのです。初対面のその日、青遠号（チビ）は
瀬川先生の合図で前肢を折って挨拶までしてくれ
ました。

川崎先輩と二人で、しばらく筑波ライディング
パークへ通いながら瀬川先生の指導を受けまし
た。はじめのうちは私が乗ると、常歩で真直ぐ歩
かせられない、一定のリズムで速歩を続けられな
い。私の前後左右のバランスの悪さがチビを横へ
動くのか前へ行くのか混乱させてしまうのです。
私は毎朝筑波RPへ向かう途中不安で、胃やおなか
が痛くなってしまい、自宅に戻ってしまったこと
もありました。あまりに敏感では乗り切れない、
でも鈍くて重いのでは押し切れない、などと勝手
な注文をしながら瀬川先生に調整していただき、



青遠号（カネニシキ）を囲んで騎乗しているのが
清水（高梨）文子氏、左は矢作直也氏、矢作（大山）
祥子氏、岩崎恵利子氏

その後の調整のヒントや運動の重要なポイントなどの指導を受けたのです。

綱島へ連れ帰ってからは無我夢中、でも本当に意義ある日々を過ごせたと思っています。青木監督、瀬川先生、川崎さんをはじめ先輩の方々に感謝の気持ちで一杯です。チビはまじめで勇気のある馬でした。後に込山君が障害や総合で活躍してくれましたが充分うなづけることです。卒業してから瀬川先生に「学生でこんなに維持管理できるとは思っていなかった」と誉めていただいたことです。

大学四年のときに高等部主将の込山君を乗せて練習を見ていたとき彼を怒らせて泣かせてしまった話など?!も書きたかったのですが紙面が足りないので次回と致します。後輩達にも感謝、感謝。

カネニシキ（青遠）号

込山 博幸
（昭和六十卒）

当時：今から二十年程前ですが、競馬馬の馬主さんから貰って来て乗る様な馬が多い中で、カネニシキは、遠野産でサラブレッドでない馬という所と、瀬川先生が調教し乗馬としての調教が出来上がっている馬という所が異色だったと思います。血統の為なのか、初期の調教の為なのか、人間への従順さは最後まで変わらなかったです。

私達の年代がカネニシキを担当する前までは馬場馬として活躍していましたが、私達が担当してから、馬場、障害、総合（3DAY）、三種目で関東団体参加、全日本団体参加を目標に、カネニシキも障害の練習を始めました。扶助への調教が出来ていきますので障害でも110cm位のコースは安定してクリア出来る様になりました。

総合（3DAY）の競技会では元馬場馬ですから、1日目の馬場はいつも上位になりました。2日目の野外走行は関東のクラスでは、充分対応出来る位でした。3日目の障害は、2日間の疲労が響いていくつか落下という様な成績が多かったと思います。

故青木監督の命を受けて岩手県遠野にて購入、瀬川先生が調教されて諸先輩が大切にしてください

たカネニシキですが、その3DAYに私が騎乗しての怪我で引退させることとなってしまいましたのでその時の事を「ご報告したいと思います。」

例年馬事公苑の走路内側にある野外コースを走って行われていた3DAYが、その年は山梨県立競技場（小淵沢）で開催されました。小淵沢の野外コースは、山を切り開いたコースで前半が山の登りUターンして山の下りという様なコースでした。前半は順調にいきUターンして山の下りという様なコースでした。前半は順調にいきUターンの後緩く下り始めて二つ目の電柱で作られた垂直障害で前足を接触してしまいました。3日目の障害は勿論棄権、その後一ヶ月程輸送も出来ない状況で小淵沢の馬房で療養しました。その後、綱島馬場へ戻ってからも曳き馬がやつとの状態となっていました。

この怪我の為、諸先輩が育てたカネニシキを引退させる事になり、また後輩がよく調教のできたこの馬で練習する機会を奪ってしまい、この場を借りてお詫びしたいと思います。



青遠号で学生賞典馬場に出場の
大山祥子氏（現・矢作夫人）

シンキスパ1号

片桐（篠崎）夏美

（昭和六十年卒）

突然の訃報を聞いたのは大学を卒業してまだそんなにならなかつた頃だと思ふ。まだばりばりの現役馬だつたはずだ。そろそろ馬場に遊びに行きたいなあと思つていた矢先だつただけにもっと早くに会いに行つていればと何度も後悔したが、もう行つてもシン君はいないんだと思つたとその後綱島に足が向くことはなかつた。

シン君はコーヒー色の鹿毛で、大きくて何となく薄べつたい馬だつた。嫌なこと嬉しいこと何かつつけて、アンモニアが眼に染みる彼の馬房に入つては頭にぶらさがつて話を聞いてもらった。シン君の眼はいつも優しく、体と比較しても大きい耳は夏も冬も毛がもこもこしていて、そしてとても温かかつた。

体の大きなシン君は障害飛越が大好きだつた。障害があまり好きではない私を乗せて、東京大会ではさらりと回つてきて優勝させてくれた。スピードも高さも並の馬よりずつとあるはずなのに、シン君に乗っているときは恐怖感はなく心から信頼できた。むしろ歩様の大きな馬体は揺りかごのように波うつて上体をしっかりと支えてくれた。私は上下する頭にただすがつてさえいれれば

いのだつた。頭から肩にかけての筋肉がちよつと固かつたが、障害間を小回りするときの彼はなお一層後肢を踏み込んで追いつき、踏み切りが合おうが合うまいが確実に障害を跳んでくれた。決して期待を裏切らない馬だつた。一方、馬場馬術の大会の前ともなると、そんな固い体躯に横脚だ収縮だと無理な姿勢を強いることになる。大きな体を懸命に曲げようとしては曲がらず、行き場がなくなつた後肢が固らずもじたばたしてしまうことになる。シン君のどうにも困つたような横顔が馬場の大きな曇つた鏡に映つていたのが懐かしい。卒業して十八年。当時の馬達もどのみち生きてはいない。革チヨで罰マラソンに明け暮れた馬場も、もう綱島には無いらしい。



綱島厩舎でのシンキスパ1号

ブルーサンダー

高久 和弘

（平成四年卒）

私が青山学院馬術部に入ったのは高等部一年の時。当時は（青学馬術部の伝統でもありませんが）従来からの青〇号といった漢字名称の馬と、ブルー△△△号といった若いカタカナ名の馬がほぼ半々。その中のブルーサンダー号（以下サンダー）は障害飛越において青学の看板馬として売出し中の馬でした。

私にとって最初のサンダーの印象は（特別扱い）されている馬だ、というものでした（結局最後までその印象が変わることはありませんでした）。普段は殆ど練習されることも無く、「放牧」か「調馬策」の毎日、たまにコーチの田中さんが来てきつちりと乗つていく、といったもの。それは他の馬には無い特別な日常でした。

当時、高等部馬術部に在籍していた私にとっては本当に特別で触れる事無い馬だつたのです。それは私が大学馬術部に進んでも変わることはありませんでした、というかそれ以上の存在になっていました。そうそうたる歴代の先輩達がサンダーを主戦馬として戦い、実績を残していたのです。その頃には押しも押されぬ青学のエース障害馬となっていました。